

学位論文要旨

音楽科の創作活動における「知識, 技能」に関する研究

- 小学校音楽科教科書における史的位置づけ及び
教材・教師・学習者との関係性に着目して —

広島大学大学院教育学研究科
文化教育開発専攻 音楽文化教育学分野

D155259 熊谷 藍

論文題目

音楽科の創作活動における「知識、技能」に関する研究

小学校音楽科教科書における史的位置づけ及び教材・教師・学習者との関係性に着目して

論文構成

序章

第1節 研究の背景

第2節 研究の目的

第3節 研究デザイン

第1項 方法論

第2項 構成

I. 創作活動における知識、技能の史的位置づけ

第1章 創作活動及び知識、技能に関する研究動向と本研究の意義

第1節 音楽科における創作活動

第1項 作曲と創作活動

第2項 創作活動研究の動向から見た思潮の変容

第3項 学習指導要領における創作活動とその変遷

第4項 創作活動における各時期の意義と変容の要因

第5項 創作活動の《取り組みにくさ》の検討

第2節 音楽科教育における知識、技能

第1項 知識論・学習論に基づいた教科固有の知識

第2項 音楽科教育における知識、技能の概観

第3項 創作活動における知識、技能の特徴

第4項 本研究の意義

第3節 用語の定義

第2章 小学校音楽科教科書における創作活動のねらいと内容

第1節 分析の概要

第1項 分析の対象

第2項 「ねらい」の分類における視点と方法

第3項 「活動」の分類における視点と方法

第2節 昭和36年に出版された小学校音楽科教科書における創作活動

: 「知識、技能の重視から学習内容の精選へとむかう時期」①

第1項 東京書籍 教科書における創作活動のねらいと内容

第2項 教育出版 教科書における創作活動のねらいと内容

第3項 教育芸術社 教科書における創作活動のねらいと内容

第4項 昭和36年出版教科書における創作活動の特徴

第3節 昭和46年に出版された小学校音楽科教科書における創作活動

:「知識、技能の重視から学習内容の精選へとむかう時期」②

第1項 東京書籍 教科書における創作活動のねらいと内容

第2項 教育出版 教科書における創作活動のねらいと内容

第3項 教育芸術社 教科書における創作活動のねらいと内容

第4項 昭和46年出版教科書における創作活動の特徴

第4節 昭和55年に出版された小学校音楽科教科書における創作活動

:「知識、技能の重視から学習内容の精選へとむかう時期」③

第1項 東京書籍 教科書における創作活動のねらいと内容

第2項 教育出版 教科書における創作活動のねらいと内容

第3項 教育芸術社 教科書における創作活動のねらいと内容

第4項 昭和55年出版教科書における創作活動の特徴

第5節 平成4年に出版された小学校音楽科教科書における創作活動

:「『つくって表現する活動』期」①

第1項 東京書籍 教科書における創作活動のねらいと内容

第2項 教育出版 教科書における創作活動のねらいと内容

第3項 教育芸術社 教科書における創作活動のねらいと内容

第4項 平成4年出版教科書における創作活動の特徴

第6節 平成14年に出版された小学校音楽科教科書における創作活動

:「『つくって表現する活動』期」②

第1項 東京書籍 教科書における創作活動のねらいと内容

第2項 教育出版 教科書における創作活動のねらいと内容

第3項 教育芸術社 教科書における創作活動のねらいと内容

第4項 平成14年出版教科書における創作活動の特徴

第7節 平成23年に出版された小学校音楽科教科書における創作活動

:「『音楽づくり』期」①

第1項 東京書籍 教科書における創作活動のねらいと内容

第2項 教育出版 教科書における創作活動のねらいと内容

第3項 教育芸術社 教科書における創作活動のねらいと内容

第4項 平成23年出版教科書における創作活動の特徴

第8節 令和2年に出版された小学校音楽科教科書における創作活動

：『音楽づくり』期②

第1項 教育出版 教科書における創作活動のねらいと内容

第2項 教育芸術社 教科書における創作活動のねらいと内容

第3項 令和2年出版教科書における創作活動の特徴

第3章 教科書の変遷からみた創作活動における知識、技能の史的位置づけと特質

第1節 小学校音楽科教科書におけるねらいと活動内容の変遷

第1項 各教科書における創作領域のねらいの変遷

第2項 各教科書における創作領域の活動内容の変遷

第2節 変遷から読み取れるねらい及び活動の特徴

第1項 変遷から読み取れるねらいの特徴

第2項 変遷から読み取れる活動の特徴

第3項 3つの時期におけるねらいと活動の特徴

第3節 創作活動における音楽の基礎的な知識、技能の史的位置づけと創作活動の特質

II. 教材・教師・学習者と創作活動における知識、技能との関係性

第4章 教材における知識、技能の質的内容：令和2年出版教科書の検討

第1節 研究の目的

第2節 分析の方法と視点の設定

第1項 分析の対象

第2項 分析の方法

第3項 分析の視点の設定

第3節 令和2年出版の教科書における知識、技能の扱い

第1項 教育出版 『小学音楽 音楽のおくりもの』

第2項 教育芸術社 『小学生の音楽』

第4節 「知識、技能の重視から学習内容の精選へとむかう時期」①の教科書における知識、技能の扱い

第1項 教育出版 『標準 小学生の音楽』

第2項 教育芸術社 『〇年生の音楽』

第5節 『つくって表現する活動』期①の教科書における知識、技能の扱い

第1項 教育出版 『小学音楽 音楽のおくりもの』

第2項 教育芸術社 『小学生の音楽』

第6節 令和2年出版の教科書と「知識、技能の重視から学習内容の精選へとむかう時期」・『つくって表現する活動』期の教科書における比較

第1項 知識、技能の量的比較

第2項 知識、技能の質的内容に関する比較

第7節 令和2年出版教科書の創作活動と必要とされる知識、技能の特徴

第1項 知識、技能からみた創作活動の特徴

第2項 創作活動に必要とされる知識、技能の特徴

第5章 教師による知識、技能の扱い：実践報告の検討

第1節 雑誌『教育音楽 小学版』における実践報告の概要（2020.4～2023.3）

第2節 知識、技能の扱い方についての検討①：「言葉で（リズム）アンサンブル」の授業

第3節 知識、技能の扱い方についての検討②：「和音に合わせてせんりつをつくろう」の授業

第4節 実践における音楽的な知識、技能の扱い

第6章 学習者に見られる知識、技能の影響及び対応：創作活動初期段階における実践の検討

第1節 特別支援教育（知的障害）における創作領域の導入とその背景

第2節 研究の方法

第3節 実践概要

第1項 対象としたクラスと学習歴

第2項 対象とした生徒の実態

第3項 活動の条件

第4項 実施時期

第5項 授業の展開

第4節 生徒の活動の概観と考察

第1項 生徒の実態と生徒の活動の概観

第2項 活動の概観における考察

第5節 模倣の検討

第6節 対象実践の分析

第1項 活動の分析

第2項 生徒の活動に見られた模倣の考察

第7節 音楽的な知識、技能に応じた創作活動の実態

第8節 知識、技能と関わる創作活動に取り組む手だて

第7章 創作活動の学習支援への可能性：《取り組みにくさ》の軽減にむけて

第1節 創作活動における知識、技能と教材・教師・学習者との関係性

第2節 教科書の変遷をふまえた創作活動と知識、技能の捉え直し

第3節 創作活動の場面設定

第4節 教科書の掲載内容と実践例との差

第5節 実際の授業から見取れる学習支援の可能性

終章 研究の成果と課題

第1節 研究の総括

第2節 研究の成果と課題

第1項 研究の成果

第2項 研究の課題と今後の展望

引用文献

謝辞 資料

論文要旨

序章

創作活動とは「新しいもの、創造的なものを生み出す活動」と定義される。多様化する社会で、常に新規性が求められる今日において、創造的であることや新たなものを生み出す行動の重要性は、言を俟たない。

そして、音楽科の授業においても、「創作」（校種によっては「音楽づくり）」という活動がある。具体的には、メロディーやリズムなどを自分でつくる活動で、学習指導要領にも明記されている。そして、昭和23年に学習指導要領（試案）が示されて以来、常に音楽科の一領域として示され続けている。しかしながら、創作活動は、歌や、リコーダーなどの楽器の演奏、曲の鑑賞といった他の音楽活動と比べてマイナーであることが現状である。その理由として、教材の不十分さや、教える苦労が多かったり時間がかかり過ぎたりすること、また、活動における成果が見出せない場合があることなどが指摘されてきた。これらが相まって、創作活動の《取り組みにくさ》という漠然とした風潮を生み出し、活動の敬遠につながっている。

創作活動の《取り組みにくさ》の要因の1つとして、知識、技能との関係が古くから指摘されていた。例えば、大正後期から昭和初期における創作活動（児童作曲法）は、図工科の自由画や国語科の綴方とは異なり、音楽固有の知識、技能に影響されるという難しさがあり、それに伴い創作指導への否定的な見方があったと指摘されている（三村，2000）¹⁾。そして、近年では、常時活動のなかで知識、技能を養うことで、創作活動がより良い授業となるという実践例の紹介がある（平野ら，2017）²⁾。ただし、創作活動と知識、技能について、その変遷をたどる継続的な検討や、関係性に焦点を当てたものは、必ずしも十分ではない。

これらのことを鑑みて、創作活動の《取り組みにくさ》を解消するためには、知識、技能の切り口からの捉え直しや、多角的な検討が必要であると考ええる。

そこで、本研究では、音楽科教育における創作活動について、そのねらいと活動内容から変遷

¹⁾ 三村真弓（2000）「大正後期から昭和初期の小学校唱歌科における児童作曲法の展開と特質」『音楽教育学』30巻，1号，pp.42-60.

²⁾ 平野次郎（2017）『「資質・能力」を育成する音楽科授業モデル』学事出版.

をたどり、創作活動における知識、技能の史的な位置づけを見出したうえで、授業を構成する「教材」「教師」「学習者」それぞれの立場から、知識、技能との関係性を明らかにすることを目的とする。そして、これらの研究をとおして、創作活動の《取り組みにくさ》改善に向けた示唆を得ることを目指す。この目的を達成するために以下の研究課題を設定した。

1. 音楽科教育において創作活動がどのような変遷をたどってきたかについて、教科書の内容から検討する。(第1・2・3章)
2. 現行の教科書、実践報告、生徒の活動内容の分析から、知識、技能の具体的な内容、扱われ方、影響等を明らかにする。(第4・5・6章)
3. 以上の検討から得られた知見を基に、創作活動の学習支援への可能性を提示する。(第7章)

本研究は、二部で構成されており、Ⅰ部(第1章～第3章)では、先行研究の検討や教科書分析を通して創作活動における知識、技能の史的な位置づけを見取り、Ⅱ部(第4章～第7章)では、教材・教師・学習者からの検討を通して、知識、技能を取り入れた学習支援の可能性を探る。

Ⅰ. 創作活動における知識、技能の史的な位置づけ

第1章 創作活動及び知識、技能に関する研究動向と本研究の意義

先行研究の検討からは、これまで創作活動が大きく揺れ動いてきたことや、活動に《取り組みにくさ》が伴っており、その背景には知識、技能が影響していることが窺われた。しかし、創作活動を知識、技能の視点から研究したものは十分とはいえない。そこで、まず創作活動における知識、技能の史的な位置づけや関係性を今一度、明らかにする必要があるといえる。その際、これまでの変容をふまえると、一時的な流行だけでなく、長い期間の動向を追った検討が求められる。そのうえで、教材・教師・学習者それぞれの立場における、知識、技能の扱われ方の検討をとおして、《取り組みにくさ》解消への手がかりを得ることを目指した。

第2章 小学校音楽科教科書における創作活動のねらいと内容

第2章では、昭和36年以降の小学校音楽科教科書³⁾について、ねらいと活動のそれぞれについて分類を行った。分類からは、各出版年における創作活動のねらいや活動の内容と、それらが占める割合が顕在化し、当時の様相や特徴が見出された。

第3章 教科書の変遷からみた創作活動における知識、技能の史的な位置づけと特質

第3章では、昭和36年～平成23年または令和2年までの変遷から考察を行い、ねらいや活動

³⁾ 対象は、近年まで継続的に出版されている東京書籍・教育出版・教育芸術社の3社の教科書とした。

内容の特徴を考察しつつ、知識、技能の史的位置づけと創作活動の特質について明らかにした。

変遷から、創作のねらいと活動は、その特徴から昭和36年～昭和55年の「知識、技能重視から学習内容の精選へと向かう時期」、平成4年～平成14年の「『つくって表現する活動』期」、平成23年～令和2年の「『音楽づくり』期」の大きく3つに区分できた。そして、ねらいは、作曲志向から、幅広い表現の重視へ、現在は資質・能力の育成を視野に入れたものへと変容し、活動の内容は、歌やまとまりのある曲をつくりあげる作曲に近いものから、そこからの脱却と表現の拡大、そして活動の精選へと変容していることを明らかにした。

さらに、知識、技能に関するねらいは、一定の割合で継続していたことから、普遍的で欠かすことができないものとして位置づけられていることを見出した。また、創作活動には、ねらい・活動ともに普遍的なものと、特定の出版年のみに行われている特異的なものがあったことから、その特質として、普遍的な活動があると同時に、その時々学習指導要領に準じたねらいを掲げ、新たな活動の幅を広げられる潜在力があることを見出した。

Ⅱ. 教材・教師・学習者と創作活動における知識、技能との関係性

第4章 教材における創作活動に関する知識、技能の質的内容：令和2年出版教科書の検討

第4章では、現在の教科書⁴⁾から、創作活動に必要とされる知識、技能等の抽出を行い、その質的内容について検討した。その際、創作活動の転換点である昭和36年及び平成4年出版の教科書との比較をふまえながら、現行の創作活動に必要とされる知識、技能の質的な特徴を見出した。その結果、令和2年教科書で必要とされる主な知識、技能等は、リズム感や拍子感といった音楽を構成する基本的な要素と関わるものと、楽器演奏、思考力に関する力であることが明らかとなった。音楽固有の知識、技能のなかでも、このリズム感や拍子感は、比較的習得しやすい内容である。また、創作の際に音楽を鳴らす方法である楽器演奏は、音高感が必要な「歌う」という方法よりも取り組みやすく、音高感に比べて個人の能力差による影響も少ない。このように、令和2年の教科書で必要とされている音楽固有の知識、技能は、習得しやすく、個人の能力差に影響を受けにくいものとなっていることが特徴である。

このような基本的で習得しやすい知識、技能が必要とされていることは、音楽固有の知識、技能の難しさに起因する創作活動の困難を軽減していると考えられる。加えて、様々な発想が評価され、個人の考えが尊重される思考力が含まれることは、失敗や間違えが生じにくい創作活動につながっているといえるだろう。

第5章 教師による知識、技能の扱い：実践報告の検討

第5章では、教師の立場から知識、技能と創作活動に着目した。教科書の内容を用いた実践報

⁴⁾ 現在まで出版が続いている、教育出版『小学音楽 音楽のおくりもの』と教育芸術社『小学生の音楽』を対象とした。

告⁵⁾から、第4章で明らかにした知識、技能が具体的にどのように扱われているのかを概観した。

現場の教員による教科書を扱った創作活動の実践報告では、「リズム感」「拍子感」といった音楽の基礎的な知識、技能に関わる独自の活動を取り入れたり、教科書では、必ずしも必要とされなかった和声感を学ばせたりしたうえで、創作活動につなげている。一方で、構成などを考える力に関しては、教科書の内容を例として使いながら音楽の仕組みなどを学ばせている。これらのことから、教科書を例として活用しつつも、知識、技能を習得したり、実感を伴った理解を得たりする独自の活動を追加することで、創作活動に必要な知識、技能を補っている。つまり、実践では、知識、技能の習得や定着を促す活動をより充実させたうえで、教科書教材を活用した創作活動を行っているといえる。

第6章 学習者に見られる知識、技能の影響及び対応：創作活動初期段階における実践の検討

第6章では、学習者による創作活動の観察から、知識、技能の習得が活動へ及ぼす影響や学習者の活動への対応などの検討を行った。対象は、個人の理解力の差に関わらない汎用的な創作活動のあり方について探る一環として、特別支援教育における実践とした。知的な理解に難しさのある学習者を対象としたため、知識、技能の習得は容易ではないながらも、実践からは、音楽的な知識や技能に応じた創作の実態が明らかとなり、取り組みの方法について示唆を得ることができた。

創作活動の初期段階における実態として、以下の3点が明らかになった。第1に、条件に沿った創作ができる生徒と、できない生徒がいたことから、創作は、音楽をつくるという概念の理解や、音楽的な知識、技能に左右される。第2に、創作活動において模倣が発現する要因は、生徒の特性や興味関心、交友関係など生徒個々によって異なる。第3に、模倣が、創作の契機となったり、表現の深化を促進したりする様子が見られたことや、模倣の助けによって、みんなの前で発表する姿が見られたことから、模倣が、創作の導入・発展及び場の共有の役割を果たすなど、創作活動に一定の成果をもたらす得る。

上記実態の第1より、創作活動に取り組む際に音楽的な知識や技能が影響している様子が見られたことから、基礎的な知識、技能の必要性が改めて示された。そのことを考慮したうえで、創作活動の初期段階における支援には、以下の可能性が示唆される。まず、自らの知識、技能をもって条件に沿った創作ができる場合は、模倣による音のコミュニケーションから、新しい表現へとさらに発展させられる可能性がある。次に、自らの知識や技能だけでは条件に沿った創作ができない場合は、創作の導入として周りの演奏を模倣するなかで、コツをつかみ創作につなげられ

⁵⁾ 対象は、雑誌2020年4月号～2023年3月号の『教育音楽 小学版』に掲載された以下の5件の事例である。
西澤美香(2021)「私の教材料理法」『教育音楽 小学版』第76巻、6月号、pp.66-67. 松長誠(2021)「私の教材料理法」『教育音楽 小学版』第76巻、7月号、pp.62-63. 松長誠(2021)「私の教材料理法」『教育音楽 小学版』第76巻、8月号、pp.62-63. 高田英美香(2022)「私の教材料理法」『教育音楽 小学版』第77巻、6月号、pp.66-67. 村山和幸(2022)「私の教材料理法」『教育音楽 小学版』第77巻、9月号、pp.64-65.

る可能性がある。また、つくることの理解が難しく創作活動ができない場合は、模倣した音楽を披露することが活動の場の共有につながり、活動に参加する手だてとなる可能性がある。この場合、創作には至っていないが、生徒の特性を生かして活動の場に参加できることは、自己存在感をもたせ、共感的人間関係を育成するなどの意義がある。

以上をふまえると、創作活動の初期段階の支援としての模倣は、知的障害のある生徒が創作の条件というハードルを乗り越え、活動に参加することを保障し、活動そのものを促進するなど、有用性は高い。創作活動の実施にあたっては、生徒の音楽的な知識、技能をふまえながら、生徒が模倣する様子を見取るとともに、模倣しやすい環境や、模倣し合える環境を整えることで、創作活動の場における居場所を確保し、創作をスタートさせ発展させられるのではないかと考える。

第7章 創作活動の学習支援への可能性：《取り組みにくさ》の軽減にむけて

第7章では、第4章～第6章をふまえて知識、技能と教材・教師・学習者の関係性を示しながら、知識、技能と関わる創作活動を《取り組みにくい》ものとしなない学習支援の可能性について提案した。

創作活動における知識、技能は、教科書において必須であることは当然ながら、その内容は基本的なものとなっていた。これは、教科書が、活動の提示を通して基本的な知識、技能が必要であることを示しているともいえる。また、創作活動における知識、技能は、教師の指導によって、創作に入る前に確認や習得が図られていたことから、創作を支える手立てとして見なされていたと捉えることができる。そして、創作活動における知識、技能は、その習得度合いによって、活動への影響が見られたことから、学習者にとって創作活動を行ううえでの前提となる力といえる。このように、創作活動における知識、技能は、教材・教師・学習者において異なる位置づけであるという関係性が見出された。

創作活動の学習支援としては、知識、技能の定着を図ることが必要であるが、その内容を基本的なものとすることで創作活動のハードルを下げることができる。そのうえで、活動によっては専門的な知識、技能を事前学習等で補うことが、より学びある創作へとつながり得ると考える。また、教科書において多様な創作活動が掲載されている現在、それらを参考にしながら、遊びの要素を含んだ活動を適宜取り入れることで、楽しみながら創作活動を行うことが期待できる。ただし、知識、技能は、個人の理解力等に影響を受ける。そのため、学習者によっては、その習得が難しい場合もある。また、教師によっては、創作の指導に不慣れである場合もある。そこで、学びのプロセスであり、作曲の一技法でもある模倣の活用を、創作活動の導入として提案する。模倣というプロセスを取り入れることによって、学習者は、創作活動の《取り組みにくさ》を軽減させられる。また、模倣とは知識、技能に基づく創作活動よりも取り組みやすい手法であるため、教師は、指導の負担感を軽減させられる。

創作は、子どもたちに創造性を養う場をもたらす意義のある活動である。知識、技能を基本的な内容に絞ったり、遊びを含んだ活動としたり、模倣を活用したりすることで、創作活動が前向きに取り組まれることを期待する。

終章 研究の成果と課題

本研究の成果として、以下の3つを挙げる。

1 つ目は、教科書に掲載された内容及びその変遷から、音楽科の創作活動にとって知識、技能は必要不可欠な位置づけである史的根拠を得たことである。また、創作活動が普遍性及び、時代に応じた新しさを取り入れる得る柔軟性の二面をもつという特質を見出した。

2 つ目は、教材(教科書)・教師・学習者からの検討より、教科書では音楽固有の基礎的な知識、技能が必要とされていること、教師によっては必要な知識、技能を事前に補う指導が行われていること、活動内では模倣が活用されていることを明らかにした。

3 つ目は、音楽科における創作活動の学習支援として、知識、技能の必要性を前提としたうえで、「リズム感」や「拍子感」といった基礎的な音楽固有の知識、技能の定着を図ることや、知識、技能の習得にむけた教師の事前指導の必要性を示したことである。また、遊びの要素を含んだ楽しめる活動や、学習者の実態に応じた模倣を、積極的に取り入れることなどを提案した。

これまで、知識、技能という切り口から創作活動の変遷をたどる継続的な検討や、関係性に焦点を当てたものは、必ずしも十分ではなかった。そのようななか、教科書の長年にわたる変遷から、知識、技能の定着がねらいとして継続して掲げられ続けてきた事実を新たに見出したことは、音楽科教育における創作活動での知識、技能の必要性を示す根拠の1つとして意義があると考えられる。また、音楽科教育に存在する、漠然とした創作活動の《取り組みにくさ》軽減にむけた知識、技能の視点からの検討は、あくまで創作活動の捉え直しの1つではあるものの、創作活動の積極的な展開につながる一歩として期待できる。

本研究の課題として、教科書内容の分類に関する方法論に検討の余地がある。分析の対象が、教科書に掲載された活動の指示や、教科書指導書に示された解説などの文章であるため、言葉の解釈に影響を受けるという困難さを伴う。その点で、分析の恣意性を排除することは不可能である。共同研究も含めた分析方法に対するさらなる検討が求められる。

教師の指導や、子どもたちの活動の見取りについて、扱った事例が限定的であったことから、実証的な検証を増やしていくことが必要である。また、今日のICTを活用した創作活動においては、音楽固有の知識、技能を必ずしも必要としない場合がある。創作活動と知識、技能のより良い関係を支える活用法についても、今後の検討課題としたい。